明治卅六年四月二日第三種郵便物認可　毎月一回二日發行

家庭雜誌

第八號

明治三十六年十一月二日發行

人道主義……一
放縱の辯……二
小供の名の附け方
三郎の出世……五
ホーム錄
婦人に關する書籍雜誌……一五
編輯を辭するに就て……一六
入社に際して……一七
かくれんぼ……一八
食事中の時間……二〇
お竹どんの牛乳……二一
花と家庭……二三
お伽噺……二七
衛生の話……二九
編輯雜信……三二

由分社
東京市京橋區新湊町一丁目十七番地

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

●本社取次書籍目錄

本社に於て取次販賣を爲す書籍は、本誌の讀者諸君に限りて特に**定價の一二割引**にて御求に應ずる事と致します。但し郵券代用にて御送金は御斷致す

▲家庭の新風味（堺枯川著）全六冊合本、定價一圓、郵税八錢。

▲第一册、家庭の組織（結婚論、夫婦論、家族論。附錄、春風村舍の記）▲第二册、家庭の事務（秘書官として、大藏大臣として、内務大臣として。附錄、由分子禁烟の歷史）▲第三册、家庭の文學（新聞雜誌、書籍、日記、手紙、和歌、俳諧）▲第四册、家庭の親愛（夫婦の間、親子の間、家族の間。附錄、毛皮裏の外套、愛犬黑）▲第五册、家庭の和樂（食卓、來客、宴會、散步及出遊、遊戲、小供及老人、家畜及庭園。附錄、當世紳士、藤室牧師の家庭）▲第六册、家庭の教育（妻の教育、家族の教育、子の教育。附錄、栃樂寺谷の晝飯、顏を美しくする法、補遺）

▲家庭夜話（堺枯川編輯）全三册合本、定價一圓、郵税十錢。各册三十五錢、郵税四錢。

▲第一册、子孫繁昌の話（堺枯川譯述、原作は佛國最近の小說大家ゾラの理想を發揮したるフルートフルチス）▲第二册、質素儉約の話（加藤眠柳譯述、原作は有名なる英國の文人ゴールドスミスの第一の傑作たるヴイカ、オブ、エーキフイルド）▲第三册、仁慈博愛の話（志津野又郎譯述、原作は米國ストー夫人が無限の同情を注ぎたる奴隷談、アンクル、トムス、ケビン）

▲我家の犬猫（動物虐待防止會叢書第一篇）定價八錢、郵税二錢。（此書に限り郵券九錢にて御注文に應ず）

▲枯川隨筆（家庭文學第一篇）定價廿五錢、郵税二錢。

▲言文一致普通文（堺枯川著）定價廿五錢、郵税二錢。

右以外の書籍に對しては取次を御斷り致す旨前號に廣告して置きましたが、それにも係はらず猶御注文あるに依り、止むを得ず、今般は何の書籍にても取次することと致しました然し右以外の書籍に對しては**割引なし**

●本誌定價及廣告料

▲定價　一册六錢、半年分前金卅二錢、一年分同六十錢、郵税なし。郵券代用は一割增（但し五厘切手の事）

▲廣告料　特別一頁七圓、普通一頁五圓。

發行所　東京市京橋區新湊町一丁目十七番地　由分社

大賣捌所　上田屋　良明堂　東京堂　東海堂

明治三十六年十一月一日印刷
明治三十六年十一月二日發行

發行兼編輯人　東京府豊多摩郡淀橋町角筈七百三十八番地　堺利彦

印刷人　東京市京橋區日吉町十番地　中村彌助

印刷所　東京市京橋區日吉町十番地　近藤商店

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

家庭雜誌

第八號

人道主義

旭山生

人の幸福は人類互に相愛するより大なるは無し、平和は此愛より來り、進歩は此愛より來る。蓋し愛は是れ萬善の本源たる可きなり。

然り而して人の愛や父母の其子を愛するより深きは無く、父母の其子を愛するは天の萬有を愛するに如かず。

夫れ天の萬有を生ずるや、必ず之を撫育して、其本性を擴充成就せしめずんば止まず、蓋し是れ其の至愛衷情也、而して其愛や、萬有の一毫をも漏さず、悠久の一瞬をも絶たず、野に咲けるの百合も、夕に死するの蜉蝣も、無盡に其惠を享けざる無し、況んや吾等人類に於てをや。

吾等は父母の產めるなり、されど父母をして之を產ましむるものは父母に非ず、天なり、吾等は父母の至愛を受く、されど父母をして之を愛せしむるものは父母に非ず、天なり、生は天の力なり、愛は天の衷情なり、此愛を以て夫婦相愛し、朋友相愛し、兄弟姉妹相愛し、四海萬人相愛す、博愛は即ち是れ人道の本義たり。

人道は國の異るに因りて別を立てず、人種の異るに因りて差を生せず、地位を異にするも、貧富の隔てあるも、賢愚の差等あるも、職業の別異あるも、人道の前には總て平等なり、平等に相愛するなり、平等は即ち是れ人道の骨髓とす。

然り人道は天地の衷情より發源し、人道主義は之を實現擴充せんと欲するなり、之を一家庭に行ふて和樂を成し、之を一國家に施して進歩を作す、若し夫れ世

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

界人類一國となりて之を實現するあらば、眞に總ての人類をして理想的幸福の内に人生を樂ましむる事を得べきなり、個人主義と雖ども此理想に離反せずんば排斥すべきに非ず、社會主義と雖ども此理想を根據とせずんば施用すべきに非ず、嗚呼、如何なる理想も、如何なる主義も、唯此高潔なる愛の源より迸發せるの時に於てのみ、世の光明たり力たるを得べきなり。

枯川生云。旭山君は予の友人にして耶蘇教信者であるが、此一篇は敢て耶蘇くさからず、神と云はずして天と云ひ、單に愛を以て理想と爲せるヒユーマニズムを說く所、甚だ人の耳に入り易く、予も亦全然贊同に躊躇せぬ者である。

或停車場でもう時間がきて滊車がどうしても出ないので一人の乘客が

（客）一寸外に出てもいゝでしようか、草花を少し摘んで來たいが。

（車掌）しかし、此近邊にはあまり花はありますまいよ。

（客）イヤ、こゝに花の種を持つて居るから、今蒔いたら滊車の出る迄には咲くだろう。

放縱の辨

枯川生

十月の七日頃予萬朝報の編輯局に居たれば、報知新聞の主筆石川安次郎君から左の通りの手紙が來た。

唯今家庭雜誌第七號拜見候處田川君の文の終末に於て吾兄は自ら「唯耻づらくは予の家庭の放縱なる、君の家庭の淸高なるに及ばざる事を」と云へり、是れは甚だ不都合の文字と存候、第一に大兄は家庭雜誌の記者にして家庭改良論者に非ずや、自分の家庭も放縱にして置ては相濟まぬワケなり、若し事實とせば何故に放縱なるや怪しからぬ事と存候、第二に此一節は大兄自ら信ずることの厚からざるを自白せるの感を讀者に起さしめるのみならず竊に令夫人を侮辱したるの嫌ひなきに非ず、堺氏の家庭は大兄の家庭と謂はんよりは寧ろ令夫人の家庭なり、其淸高と放縱とは令夫人の責任問題に關する義なり、僕は大兄の家庭が決して放縱ならざるを確認するものに

して大兄が此の如き言をなしたるは令夫人に對して御氣の毒の感を起し申候、蓋し大兄他の家庭を愛せんと欲して誤つて此「放縱」の文字を用ひしか、之を謙遜の辭とするも「放縱」は不穩なり、僕は堺氏の家庭の名譽の爲めに此に正誤を申込み申候敬具。

枯川兄梧下　　半山

編輯多忙の際此の閑日月あり御一笑々々々

本書は柏軒秋水の徒に示すなかれ、彼等元來家庭を論ずるの資格なし、僕此論をなすを聞かば視て以て豪傑志士の價値を損ずと爲さんことを恐る、甚だウルサキを以てなり、呵々大笑。

ハイカラと稱せられ乍ら實は極めて卒直なり、キザと云はれながら實は極めて無邪氣なる、サモ輕薄らしく世に思はれながら實は案外に親切なる我が石安君の面目が此一通の手紙の上に躍如として現はれて居る。予は深く此手紙の趣味に醉はされながら、先づ其の跡書の所を指ざして隣席に坐つて居た幸淸秋水君に示した、秋水君は吹出しながら「半山に家庭を論ずる資格があるものか」と打笑つた實を云へば半山君も先年まではバチエラー黨など丶自稱して獨身主義を唱へて居たものだから、秋水君が其資格の有無を疑つたのも無理は無い。然るに今では靖國神社の裏手なる三番町の住宅に、カナメの生籬妻籠に、四疊半の書齋に置炬燵か何かして（是れは今春予が訪問の時の實筆）、チンと暮して居らる丶次第ゆゑ、微々たる予の雜誌にも深き同情を注がれ、ツイ此樣な手紙をも寄せられる事になつたのである。それから又、半山君が「柏軒秋水の徒」と呼んで、サモ情を解せず趣味を感せざる豪傑であるかの樣に云ひなした兩君も、實は決して其樣な木强漢では無い。柏軒君は天氣の好い休日每に其二愛子を携へて郊外散歩に出掛けるので有名な人。秋水君とても「オイお千代、己れは今日寒くて／＼堪らんきにねえ」など丶土佐なまりで細君を呼びかけながら、上機嫌でビールの一二本も倒すといふお睦まじい所は每度拜見した事がある。して見れば三君ともに家庭論を爲すに於いて十分の資格のある譯である。そこで予は三君に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

對して、及び本誌の讀者諸君に對して敢て「放縱の辨」を爲す次第である。

先づ「放縱」の二字は牛山君の云ふが如く或は少しく不穏であるかも知れぬ。然しながら予は決して誤つて之を用ゐたのでは無い。予は善く味つて之を用ゐたのである。勿論予は予の放縱なる家庭が他の清高なる家庭に及ばざる事を耻ぢて居る者であるが、さりとて予は予の家庭の放縱を改めようとも思はぬ。予は予と予の妻との性情に従うて放縱の間に一種の趣味を得たいと思うて居る。そもそも放縱とは如何なる意味の言葉であるか。不取締と云はうか、ヤリパナシと云はうか、ドウも適當な言葉を得ぬが、マア其邊の意味であらう。予と雖も何も不取締が無い、ヤリパナシが無いとは云はぬが、不取締には又不取締の趣味があり、ヤリパナシには又ヤリパナシの趣味があると思ふ。庭の草を取り盡して盆石の樣にしたのも結構だが、さりとて雑草の離々として生ひるが儘になつた所も亦甚だ面白いでは無いか。例へば、片づけ博士と云はるゝ佐治實然君

の家庭が、秩序整然として一糸亂れずと云ふ有樣であるのは、固より結構の至ではあるが、さりとて總べての家庭にソンナ事が望まれるものでは無く釘にぶらさがつたズボンの先にメリヤスの股引が現はれて、其又股引の先に靴下がくつゝいて居ると云ふが如き予の家庭に於ては、止むを得ず雑草離々たる趣味を取るより外は無い。又内村鑑三君は外泊する事をヒドク厭がつて、屡々家を明ける者は終に世界に家なきに至るぞと、嚴しく教訓して居られるが、予の如きは東京の郊外に住んで居て、月に三度も四度も下町に泊る事がある。それが何も必ずしもノッピキならぬ用事の爲と云ふでは無い。ツイ談話の興に引かれて夜と共に語りあかすと云ふ樣な塲合もある。「君が家は我が家に似たり」と云ふ誰やらの詩の句があつたが、彼我相忘れて親友二人、枕を並べて打伏す所に亦一種の趣味が無いでも無い。予が朝報社に居た時には、おりおり夜勤の番に當つて、十一時過の雨ふりに遠い處を歸るも馬鹿らしいと洋服の着のみ着のまゝ、奥の廣間に柏餅のゴロ寝を

やつた事も多度ある。眞逆内に歸らぬからとて細君の疑ひを受けるほど不信用な譯でも無し番が變つては寢つかれぬと云ふほどの神經家でも無し、夜具や蒲團に小六かしい注文をするほどの殿樣でも無し、予は到る處に安んじて寢るのである。或時の如きは、家庭雜誌の編輯を濟ませて、朝報社から一週間ばかりの暇を貰つて、至極愉快にブラリと散步に出かけ、ツイ或友人の所に寄つて急に思ひたち、内には葉書を一枚出したきりで、其まゝ房州まで遊びに行き、二三日して歸つて見れば、挿畫の木版を失つたと云つて、活版所から人が來るやら電報が來るやらと云ふ騷ぎもあつた。こんな放縱な有樣を自慢する譯では勿論無いが、さりとて以後乾度愼みますると誤るにも及ぶまいと思ふ。又、田川君其外多くの嚴格なる人の家庭には、酒は恐るべき毒物として斥けられてあるらしく見受けられるが、予は其酒の趣味をも愛して居る。勿論、予とても謂はゆる酒のみは大嫌で、酒が無くては一日も居れぬと云ふ樣な酒の奴隷には感服が出來ぬけれど、少々めしあがる所に亦頗る面白味もあると思ふ。少年などの一滴も酒は飮まずして、薩摩汁の四五杯暖い飯の五六杯も食ふ所は、亦甚だ深き趣味があるが、さりとてイヤに品行方正ぶつて、心中には卑劣な慾食ばかり抱きながら、酒さへ飮まねば君子であるかの樣に、外形ばかりを拵へる先生には予は斷じて敬服せぬ。又、一度は酒に溺れた人が翻然として其非を悟り、猛然たる良志を振ひ起して堅く禁酒の行を守る所などは、一種崇高なる趣味を現ずるものであるが、さりとて天性の酒ぎらひが、酒は狂水なり、予は斷じて狂水を口にせずなどゝ力んでも、それでは何の面白味も出て來はせぬ。予の家庭に於いては、漢來れば漢現じ、胡來れば胡現ずと云つた樣な鹽梅で、酒の有無はお客次第、松茸飯に豆腐汁、茶を飮んで菓子を食ふと云ふ淡白な小宴が催される事もあれば、滿醉淋漓、放歌亂舞と云ふ樣な豪傑連の酒會が開かれる事もある。そこで予たる者「予の家庭の放縱なり」と云ふ一句を吐かずには居られぬのである。予の放縱の辯斯くの如し。敢て諸君の批判

を乞ふ。

（再言。こんな事を書いては内村君や、田川君や、佐治君やに叱られるには極つて居るが、さりとて嘘を云ふ譯には行かぬ。予は惡い事も澤山するであらう。然し嘘は云はぬ積りである。予は嘘を云ふほど卑怯な男では無い。諸君願はくば予の愚を許せ）

小供の名の附方

小供を產んだ時、我家の先祖、又は父親などの名を一字なり二字なり貰つて命名するのが、日本在來の家庭に其例を多く見た。これは家と云ふ事を重んじた結果と、それから其人の品格名譽なぞをあやからうと云ふ心であらうが、明治の家庭では多少その命名法も變つて來た。記者の知己の一人は此間可愛い女兒のもうけたが、その父親が當年三十四であるから、「みよ子」と附けた。これは年から割出したのである。又他の一人は初めて男兒を產みそれに「以一」と命名したる理由を聞いて見ると慓輕な話。即ち一番最初に自分の家庭を訪れたのであるから「イの一」即ち料理屋で用ゐる下駄札番號から考へ付いたのであつた。

三郎の出世

——レキサン侯爵となる話——

流星子

ある所に極々貧乏な御百性が有ました。渠が病の褥に就いて、今や生命も終らうとした時に、三人の子供を枕邊に呼で、扨申しまするには、「予も今度は迚も助かるまい、それで、予が死んだなら、あの水車は、太郎と二郎の兄弟にやるから、二人共よく稼ぐが宜い。又、三郎にも何かやりたいが、見る通り何にも財產がないのでやれない。唯此の猫をやるから、其れを予の遺物と思ッておくれ。」と遺言して死んで仕舞いました。兄の二人は水車を貰つたから、其れで幾何かに有つきました。然し弟の三郎は猫を貰ッたのだから、何の役にもたちません。「馬鹿々々しい、猫を貰ッたッて、何になるものか、ヤメテ打ち殺して肉でも燒いて食てやろう。」と獨語を言ッてコボして居ました。すると猫は驚くまいことか、たいそう驚いて三郎の傍に寄り「もし三郎さん、其樣にお歎きなさるな、貴君が私

を御貰ひなさッたのは、貴君に運か向いて來たのです、私が是から大功を立て、貴君を立派な、其れは立派な驚くやうな立派な人にしてあげます。」と言ひました。三郎は驚きました、何しろ猫が口をきいたのは始めてだから、此の猫は餘程神通力があると思ッて俄に貌色をなほし、急にニコ〳〵として「左樣か、其では何分賴むせ」。「宜う御座ますとも、まア細工はリウ〳〵仕上げを御覽じろ、直です一年經ぬ中です。」と言ひ捨てゝ家を出て仕舞ひました。

何處へ往たのでせう？、オベルの林へ往たのです。猫は林へ往きますと、向ふから鹿が飛んで來ました。鹿は皆樣の知ッて居る通りの性來おとなしい獸です。猫は之を見ると、好獲物と飛びかゝり、忽殺して肩にひッかけ、ベンゾル王宮さしてドン〳〵やッて往きました。王宮では驚きました、小さな可愛らしい猫が、大きな鹿をかついで、とんと宮中の案内を知つて居るかの樣に、ドシ〳〵奧へ這入て往ましたから。

猫はやがて王樣の御前に來たり、玉座の前に蹲踞ッて、「陛下よ、今日私の主人、侯爵レキサンが、オベルの林に狩を試みました所、此の如き大きな鹿を得ましたに依り謹んで陛下に献上いたしまする」と申しました。陛下聞召して「好獲物哉、滿足に思ふぞ」との御言葉でした。

猫は王宮を出て、三郎の許へ立ち歸り、有りし委細を物語りました。扨五六日過ぎた後、猫は再び家を飛出しました。何處へ往ッたのでしやう？又オベルの林へ往つたのです。其處で猫は再び大きな獲物を得まして、又王宮へ赴き其れを主人侯爵の名で献納しました。王樣も侯爵レキサンは、如何なる人物か見た事はないが、使に人間をよこさず、いつも猫をよこす、面白い男哉。殊に此の猫ナカナカ才覺あッて、氣の利いた人間は遠く及ばざる程である面白い猫哉と思召ました。彼は立ち歸り委細を三郎に語りました、其後は暫く事もなかッたが、或日猫は家を飛び出して、何れへか出て往きました。恰度其日は、非常に熱い日でしたから、定めし涼みにでも往たのだらう、其れとも又林へ狩に

でも往たかと三郎は思ひながら家に居ました。するとやがて猫は、あはたゞしく走て家へ歸ッて來ました。が「もし三郎樣、サアサア貴君の御出世の日が參りました、私と一所に御出で下さい、何んでもかまひませぬから前の川で泳ひでお出でなさい」「だが私には泳ぎは出來ない」「出來ないんですッて?それは困ッた、何故習て置なッかッたのです」「其は習ッて置けば宜ッたけれども、如何も仕方がない、だが何が始まるのだ?」「何んでも宜うござる、私に任せてお置きなされば、惡い樣には致ませぬ。然し此際に及んで泳が出來ないとてお廢なさらずと。ハテ宜うございます、何でもかまいませぬから河の中へ這入て、ボチャ〳〵やッて居らッしやい、私が宜樣にしてあげます、今日は貴君は王樣に御目見なさるのです」と猫は獨承知して、三郎を伴て河の邊へ往ました。三郎は衣服を脫いで川の中へ入り、ボチャ〳〵やッて居る、スルと向ふの方から下に居らう〳〵と王樣がやッてお出でになりました。猫は之を見ると「サア大變だ〳〵、盜賊々々、今

年の盜賊は油斷がならぬ、主人の衣服を盜んで往た、皆な來てくれ、皆來てくれ、近所の衆やあい!」と大聲を擧て其處等中をかけまわッて居た。王樣は前面が騷がしいから馬上に延び上て御覽になると、折々王宮に見えた猫が、あちらへかけ、こちらへかけ、狼狽まはッて居るから近侍の衆を召して「こら〳〵折々宮中へ參る猫が彼處で大層騷ぎ居る、何事であるか聞いて參れ」と御言葉未だ終らぬ中に、猫は今始めて王樣を見つけた樣な風で、疾風の如くに飛んで參り「もし王樣何卒私をお助け下さりませ、私主人侯爵の君、今日此の通り熱うござりまするので、河で泳いで居まする中、脫ぎ置きました衣服をひッさらひ、一目散に逃げてしまひました、私は番をして居りましたが猫の事で人間にはどうも敵ひませぬので、何卒お助け下さいまし侯爵も衣服を取られましたので、河から上る事も出來ず、彼の通り水の中でボチャ〳〵やッて居ります何卒お助け下さいまし」と歎願に及びました。王樣は之れをお聞きになッてやれやれ氣の毒なこれ家來共、余が衣替

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

えを侯爵に取らせエ」といふ有難い御言葉に猫は再拜して之を戴き、走り來て三郎に着せ、又王樣の御許へ走り往て「恩賜の御衣、侯爵有難く拜領仕ります、尙此の上の御惠みは侯爵に拜謁仰せ附けらるれば、如何斗り有難く存じ奉ります」と恭しく申述ぶれば、王樣も御機嫌麗はしく、「余も遇ひ度ふ思ふ」との御言葉です、猫は大いに喜びて三郎を伴來れば、三郎は恩賜の御衣を着て、ずッと侯爵になりすました了見で侯爵の品格を保ちつゝ王に拜謁しました。其時猫は又進み出で、王樣に向ひ「主人侯爵の住居は、此より程遠からぬ處にあります、折から日陰も熱き夏の炎天、龍駕を其處に枉げられて御休憩在らせらるれば誠に有難き仕合に存じ奉ります」と何處で覺えた言葉だか慇懃に申し上げました。王樣御機嫌斜ならず、「左樣致すであらう、こら家來共、侯爵は徒歩の樣である、余が乘替を取らせい」といふ御言葉に、侍臣等は金銀の鞍置いたる馬を曳いて侯に取らせました。三郎の侯爵はすまして馬に乗り移り、轡を並べて王と共に、靜かに馬を歩せます。猫は先へ立て案内して居たが、やがて道の二三十町も來たかと思ふ頃右手なる岡の森影に一ッの孤城を見出しました。猫は先共の者に向ッて「彼が侯爵の住居でござる、皆樣は後よりゆる〳〵御出なされ、私は先きへかけ拔けて、城中の者共に君の御成を告げ、不都合の無き樣申し付け置きますから」と言ひ捨てゝ城中に飛び入りました。此の城は一體何んでしやうか？此の城はボルカチルと云ふ魔法使の住で居る城です。猫は城内へ入ッて魔法使の前へやッて參りました。折りしも晝餐の時とて、魔法使の食堂には、大勢の料理方集まッて騷ぎの所です。猫は魔法使の前へ立て大音上に「大法師よ、御身は魔法の名人で、姿をば或は獅子、或は虎、或は熊、或は鷲、或は狐、或は狸、千變萬化自由自在だといふが予は恐らく噓だと思ふのだ、噓であらう？如何だ？」と言ひました。すると魔法使は、大聲でカラ〳〵と笑ひ「馬鹿野郎、手前は予の魔法を疑ふのか？」「左樣さ口で云ふばかりでは分らない實地を見なければ」「それなら實地を見せてやらう

か？」「見せてくれ、如何か鼠になッて見せてくれ」「よし容易事だ」魔法使は身を一轉すると、忽ち小さな鼠となッてチョロ〳〵と猫の足下へ匍匐て來ました。其の時猫は足を擧て之を押へ頭からガッと一口に食て仕舞ひました。其れから魔法使の家來共に向ッてこれ手前達予の命に反むくと、此の魔法使が手本だぞ」。一同へイと降參しました。

猫は急いで城を飛出し、來て見ると恰もよし、王は三郎の侯爵と轡を並べて、今入城と云ふ所です。猫は正面の城門八門字に開かせて、王様の御入り！警鈴の聲と共に王様奥殿へ入御になりました、正面の高座に御着座あれば猫は魔法使が用意した晝飯の馳走を、そッくり其の前に陳列して饗應山海の珍味を盡しました王も御機嫌斜ならず、夕暮迄此處に御小憩ありて還御になりました。是よりして三郎は一城の主、侯爵レキサンと名のりて宮庭に伺候し、終には此の王様の御氣に叶ひて其の王女を賜り、位大侯爵を賜りて、家は益富み榮ゆる事となりました。猫も其功に依りて王の侍臣となり、今では、シルクハットにフロックコート胸には金の勳章を附け、足には玉の靴を穿いて、出仕も馬車でエーイ、エーイ。

▲歐洲人民の平均年齡

歐羅巴諸國民の平均年齡表を見ると那威瑞典の人民が第一長命で平均年齡五十年、次が英國で四十五年と四分の一、佛國が四十四年半、普魯西が三十九年、澳太利と西班牙の人民が最短命で平均年齡僅かに三十三年。

▲女尊男卑の地

新奇な宗教がフインランドと云ふ處に起つた其教旨は女尊を認むるので、之れに屬する男子は其妻又は許嫁の女に對し服從を甘んずる旨を誓はせられる其上、妻又は許嫁の女に向ふて毎週一度其誓をくりかへすそうだ、會員は概して質素に品行よく暮して居るが其中より婦人は監督者を撰擧する、そして、男子が其誓を實行して居るかどうかを監視さして、背誓者を罰せしむるそうだ。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ホーム錄

△ホームと云へば、極めて美しい文字であるのに、世間ではまだその趣味を解して居ない。現に我々が見る如く、國際問題に狂奔する政治家、社會教育を叫ぶ志士、藝術批判に忙しい文學者などの、小さいやうで大きなホームと云へるこの問題に、考へを及ぼして居ないのは、日本の文明を導く點に於て、大に忠實ならぬものと云はねばならぬ。これは畢竟、此等の人々が自分の勢力の消長とか、利害の關係とかに、直接與らない結果、ついかゝる不始末で續けて來て居る事と思はれる。實際ホームとは何ぞと云ふ問ひに、我輩はどう答へるであらう。あのゼントルマンなる文字の眞意義が、一種道義上に用ゐられて、他に適譯を見出し難いやうに、ホームの意義また然りである。されば我國では、新思想の上に現はれた美しいものゝ一つで、從來の家族制度の中に見たことのない、獨特の意味を有して居る。何しろ此文字ほど我々に温かい聯想を與へるものはなく、丁度春の微風が人の精神を和げるやうな工合に、一種妙なる味を感得する事が出來るのである。人間界に於ける實現のユートピヤとは、ホームの間でゝも認められる事が出來やうか。健全なる文明の發達は、理想的ホームのありやなしやで判斷せられるであらう。

△家庭に關した在來の書籍や雜誌は、多く女性に斗り重きを置き、一家の主人の心得に說き及ぼしたものは甚だ少ない。固より家庭とは主婦の司る小さな世界のやうなものであるが、肝腎の主人其人の心が改まらない中は、いくら主婦が骨を折つても無駄事と云はねばならぬ。我輩は此點に於て『家庭の新風味』を深く尊ばざるを得ない。一體今日はまだ所謂舊思想と新思想とが調和されない過度の時代だから、一家の內でも、親父が昔風にかたくなつて居れば、息子は當世風の輕薄に流れて居ると云ふやうな次第。それに、從來の男子教育と女子教育とが並行しなかつた爲め、自然と女子が男子の蔑視を受けるやうな氣味になつて、此等が眞

に家庭を作るに大害を與へたものである。で此等の間で、ホームを造るのは、なか／＼困難な事業であるがそれも主人と主婦との心得一つで、方法の取り方もないではない。差當り當人はこの場合に處する研究をする事が、第一の要件であらうと思ふ。

△兎角外面を装ふ家庭には、春の温い風は吹いて來ないのである。見られよ、彼の昔風に組織されて居る中流以上の家庭を。主人は恰も絶對君主權を持つて居る國王の如くに高く構へ、主婦は概ね奴僕の如くに使はれ、そして、主人の前では一言半句も反抗しないと云ふ有様である。これが、其間に生たつた子弟の頭腦に家庭とはかたくるしい面白くないところ、と云ふ印象を與へる原因で、結果は多く世間の惡い風にそまり易い人物をこしらへて了う。かう云ふ風な家庭には、貞操と云ひ、孝行と云ふ美しい行爲も、皆な義務許りの形式で、眞の腹から盡すと云ふのは微塵もなくなつて、往々波瀾が起り易くなつて來るのである。されば、家庭の融和を計らうとするには、第一に此の如き弊を避

けて、可成家内のものが眞摯にして、假面を被るやうな擧動に出でない事に、考へを及ぼさねばならぬ。

△『女子の一生は愛情の歷史で、その世界は愛が世界である。』と西洋の人が云つたが、誠に其通りで、其夫に對するにも、其子に對するにも、常に愛と云ふ色が燃立つて居らねばならぬ。然るに、我國の多くの家庭では、主婦は大抵純然たる世話女房で、常に家政にばかり心をくばり、愛と云ふ世界には、段々と縁が遠くなつて行くのである。されば、娘の時代に修めた琴もほんの嫁入の資格ばかりで、嫁に來て了へば袋の中に入れて床の間に飾つたきり、と云ふやうな調子、それも子供の世話や家政に追はれて、止むを得ない結果でゝもあるなればだが、特更に趣味の媒介を遂けるに到つては、何たる愚かな事であらうか。總じて、我邦の婦人は家に在る時くすぼつて居て、いざ外に出るとなると、非常に氣をもみ、樣々の見得を張るのが常である。此樣な工合では、決して趣味と云ふ無形の勢力が湧いてくる道理はない。趣味のない家庭は冬の野の如く落

異たるもので、我輩の目から見れば、殆んど無價値なものである。

△何時も我輩が獨逸帝室の寫眞を見る度に感動する。先づ正面に皇帝が其愛兒を抱いて立ち、其側には皇后の微笑を含んで、同じく愛兒を手にしたのが座り、周圍には皇子皇女等が或は肩に倚り、或は足を投出して互に笑い興じつゝ戯むるゝ樣、如何にも靄々たるものに見えて居る。若しこれを東洋流儀の學者先生に見せやうならば、神聖な皇室の中で、なんと云ふ行儀の惡い事だなどと、赤くなつて怒るであらう。併し、我輩の考へでは、其行儀の惡い處が、とりもなほさず隔て氣のない、美しい表情の結果と解釋する。兎角我邦中流若くは上流の家庭では、行儀々々と無暗に世話を燒き、蔭で不品行をし乍ら、表面で嚴正を裝ふ父親もあれば、親の前でこそ〱して、外へ出ると惡戯をする子供もある。それは各自に外面ばかり作るので、次第々々に眞摯な動作がなくなり、互に分け隔てが出來て、終には外へでも行つて氣晴らしをやらう、などゝ云ふ氣になるのは當然である。かうなると、全く家庭の趣味と云ふものが滅して了ひ、從つて、子弟などは浮世の惡い風にあたり、其所で高價な不潔な快樂を買はうと云ふ慾念を起すのが多い。恐るべきは子供をかゝる墮落的方面に向はしむる一事で、今後の家庭は全力を濺いでもこの弊を矯めねばならぬ。即ち趣味濃々たる一家團欒の光明に接せしめ、常に家庭をして飽かしめない工夫をめぐらすのが、第一の急務であらう。同時に、愛の方面より、何時も僞りのない態度を保つ事も亦肝腎であらう。

△我邦の家庭では、今日でもまだ日曜日と云ふものに重きを置いて居らないが、あのアーピングの書いた本の中に、かう云ふ事が載つてある。題はロンドンの日曜日で、先づ日曜日の朝になると、各商家では、其店を閉ぢ、製造所の烟突から煙も昇らなければ、勿論此日ばかりは不斷煤煙の中に輝いて居る太陽が、美しく光を洩らすのである。それで、日頃喧しい往來が靜かになり、人々は全く業を休んで、仕事着も日曜着と

更り、心まですつかり清潔になつて居る。その內に、會堂の鈴が鳴り出すと、幾多の群集が羊のやうにぞろ〳〵と繰り出す。父親も行けば母親も行く。無論お婆さんも一所に並んで、娘小供はさきに立つて行く。彼處の二階の窓には化粧の手傳ひをした下婢が、皮製の祈禱本小脇に抱へたお嬢樣の後姿を、羨しさうに見て居るもあれば、此處の街筋には、一樣に古風な制服を着て居る貧民學校の生徒もある。やがて、寺の鐘が鳴りやむと、馬車のきしりもとまり、足音さへ聞えなくなつて、會堂へ殘らず人々が落付いて了ふて、オルガンの神聖な響が隅から隅に傳はり、續いて祈禱が始まる、此時の感ばかりは、アービングも、丁度浮世の苦みにまけて居る靈魂が、凱旋の調子で以て、天國へ昇つて行くやうに思はれると書いて居る。朝の勤めが終ると、往來が再び騷しくなり、やがてそれも亦やむと、此度は各自が自宅へ歸つて、日曜日の晝飯が始まるのである。で、此時間ばかりは、誠に愉快に趣味のある最上の時間で、外の社會的樂みが全くなくなり、一

週間のうち、あちらこちらと仕事に追はれて、別れ〳〵になつて居た家族のものが、皆な一堂に集るのである。學校の寄宿舍に居た小供も、この日は兩親の膝下へ歸つて來て居るし、種々な物語がそれからそれへと湧き出して、一同笑ひ興じる樣が何とも云へぬ味ひであらう。午後になると、家々では、思ひ〳〵にそろ〳〵公園や近郊あたりへ散歩に出かけ、綠なす自然の懷に抱かれて、一週の骨折は休めるのが常だとある。何とまあ面白い日曜日ではないか。兎角我邦の人士は、不規則に一週間を費やし、肝腎の日曜日になつて、何の樂しみもなく過すのが普通であるが、これは甚しく間違つた事であらうと思ふ。

○世界の壞滅

近頃面白い計算が佛蘭西學士會から發表された、其說に由れば陸地は毎年、波濤に洗はれ、河水に流され、風雨に晒されるので少しづゝ減少して居る。之を計算して見るに四百五十萬年の後には世界は全く洗い去られ、現在の陸地は波の底になる勘定だそうだ。

婦人に關した書籍雜誌

△少　女（綠岡隱士著）　京橋　警醒社

△女子立志編（加藤眠柳著）　神田　內外出版協會

△天眞爛熳（福島四郎編）　牛込　婦女新聞社

右の三書は共に本社の批評を乞はれたのである。此度は多忙であつたが爲めに、熟讀する餘暇がなかつたが、併し一見した所何れも家庭の好讀物なるを失はない。「少女」は女子の第一期、即ち少女と云ふ時代を、詩的に叙說したもので、作者の趣味のある所も略ぼ覗ふ事が出來る。「女子立志編」これは只に一讀を促する斗りでない。兎に角歐米第一流の才媛女傑を傳したものであれば、家庭文庫の中に收めて置いたら、日夕其偉大な品性の感化を受く事が、少なくはないであらう。「天眞爛熳」は無邪氣な可愛き小册子。小供の罪のない話を集めたのであるが、一層深い意味から云へば、實は神のこゑである。自然の詩である。

△婦　人　新　報　東京青山南町　婦人新報社發行

最近の發行に係る第七十八號を手にした。此雜誌は婦人矯風會の機關として產れたのであるらしい。体裁に何の修飾もなく、三十餘頁の小册子ではあるが、流石に純正な主義がある丈に、滿紙に覇氣あり、光明あり特に其論說欄に於て「背德の教授」と題し、日本婦人の爲め、節操の爲め、家庭の爲めに、かの横山某の非行を絶叫した所、實に痛快を極む。元來多く賣らうとする必要のない雜誌の事なれば、從て人にも多く知られて居ないが、山の手の一方に陣して、斯の如き有力な協會と機關との存在する事は、哀れむべき程勢力なき一般の日本婦人の爲めに慶賀せねばならぬ。記者の望む所は、此會の主義が實際の間に行はれ、一旦女性を無視した男子に對し、再び社會に起つ事の出來なくなる程の制裁を早く婦人界に作り出したものである。

△家庭之友（七號）　神田　內外出版協會

△新　人（四ノ九號）　府下巢鴨村　新人社

△政教時報（百五號）　本鄉森川町　佛教徒同盟會

△割烹新聞（十四號）　神田佐久間町　家庭割烹實習會

△女　鑑（第二十號）　京橋築地　國光社

△中央農事報（四十三號）芝公園十號地　全國農事報

△帝國文學（九ノ十號）京橋銀座　大日本圖書株式會社

△佛教文藝（九號）　淺草新谷町　佛教社

△日本女學生（九號）　本鄉西片町　日本女學生會

△婦女新聞（百八十一號）牛込東五軒町　婦女新聞社

△家庭新聞（十號）　熊本市　家庭新聞社

△佐賀家庭新聞（七號）　佐賀市　佐賀家庭新聞社

△家　庭（三ノ十號）　府下巢鴨村　家庭發行所

右の十三種は殆んど每號本社へ向け寄贈されつゝある月刊雜誌乃至週刊新聞である。姑らくこゝに掲げて世に紹介して置く。尙ほ次號よりは精讀して一々批評推薦の勞を採らう。

本誌の編輯を辭するに就て

小生は本號限り本誌の編輯を罷めればならぬ事情に遭遇しました。

小生は是れまで萬朝報記者として兎も角も世に立つて居たのでありますが、此度對露問題に關し朝報社と小生との意見が一致せず、即ち朝報社は主戰論を取り、小生は社會主義の見地よりして非戰論を取り、終に止むを得ず同僚にして同志なる幸德秋水氏と共に同社を退きました。それに就いては、今度我々の主張を發表する機關を得んが爲め、又我々の生活の方法を得んが爲め、二人相計つて平民新聞と題する週刊新聞を發行する事と致し、既に來る十五日を以て其第一號を出だすべき手順に運んで居ります。

此週刊新聞發行に就いては、固より資本無し、僅に義俠なる友人先輩の助力を得て、只我が一枝の筆を命と賴むばかりで、微なりと雖も此一身の全力を注がればならぬ次第でありまして、其結果、家庭雜誌の編輯に力を分つ餘裕が無くなりました。

そこで小生は此際本誌の編輯を罷める事に致し、本號よりは小林助市氏管理の下に西村渚山氏が編輯の任に當られる事になりました。渚山氏は是れまで編輯著述等の事に關する多くの經驗もあり、又文壇に多くの知己友人を有して居られるので、本誌の將來は必ず其面目を新にして、大に讀者諸君に滿足を與ふる事と小生は確信致します。又小生も是れまでの緣故に依り、今後も多少の相談に預り、猶成るべく每號に何か一文を投じて、渚山氏の編輯を助くる心得であります。

事情斯くの如し。讀者諸君が小生の地位を憐んで小生を恕すると同時に、今後如何に渚山氏の技倆が現はれ來るべきかを樂しんで待たれんと、小生の切に希望する所であります。

明治三十六年十月末　　堺　枯　川

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

入社に際して

西村渚山

天長の佳辰も明けと差迫り、自然界の景物は黄に紅に、あるは紫に、皆な爭ふて秋の粧ひに急がしいので御座います。何時も靜平にして靄々乎たる多くの家庭では、此際清明な天地の氣に觸れ、朗らかな優しい日光を浴びて、一しほ新しい健康を享け樂んで居られる事でせう。

さて、前段の一文で既に御承知の通り、今回私が入社致す事になりました。實を云へば私も矢張皆樣と一所にこの小さな、而も淸らかな「家庭雜誌」愛讀者の一人でありました。そして、常に家庭改良に對する熱心な先生の意見と、愛讀者を待つに親切な其態度とに、影乍ら敬服して居た一人でありました。それ故、今度私がこの雜誌の編輯を致す事になつたと云ふのは、誠に意外な譯ですが、同時にまた一廉の奮發心を惹起させました。

私は誠は終に天に達すと云ふ事を知つて居ります。少なくとも世の爲めと呼ぶ言葉の床しい意味と、自己の職に忠實であるが爲に得らるゝ心の愉快さとを味ふ事は、不肖な私にも出來得ると自信して居るのです。勿論また皆樣と共に大に心を强うして可なる事は、枯川先生が今度本誌の編輯事務を辭せられても、決して本誌との關係の斷絶を見ると云ふ心配のない事です。實の處、「家庭雜誌」は先生の理想の子でして、その可愛い子供を立派に發育させたいのは山々ですが、只今度の境遇の變化で、仕事が多忙になると云ふ所から、事こゝに及んだ次第です。されば、先生は今後編輯の事務は取られずとも、矢張顧問として主筆として、永續せられるのと同じ結果になるので御座います。

終りに臨み、私は皆樣と共に、先生が今回朝報社を辭して新步調を採られた理由及び事情に向つて、充分の同情を濺ぎ、併せて從前に比してより偉大なる、より壯快なる獨立の事業に向はれる、その雄々しき發途を祝したいと思ふ。

かくれんぼ

―どうして姫子が見えなくなつたか―

『何と云ふ厭な日なんでせうねえ。』

櫻子は格子窓からだゝぶりに降つて居る外の景色を眺め遣り乍ら、忌々しさうにかう云ふと、貞吉も直ぐに合槌を打ち、

『本當だね姉樣！ つまらないなア。』

『今日は土曜日だもの、遊びたいわねえ。』

一番小さな姫子も同じやうに口惜しがる。すると、丁度オツカサンが此部屋へ這入つて來て、

『厭に委げてるのねえ。どうしたのです。』

『雨が降つて、外へ出られないからです。』

と、貞吉が不平らしく云ふのを、おさへて、

『それなら、お家でかくれんぼでもしてお遊びなさい。』

『それは、面白い！』

と、打つて變つた貞吉の顏付、末の子は甘えた聲で、

『ぢやカアサンお家の中なら何處に隱れて居ても可いことと？』

『えゝ〳〵宜ろしいとも。あの松の部屋と、それから奥の物置とへ行かなければ。何處で遊んでもカアサンは怒りません。』

これで相談が漸う纏まり、三人の子供達は暫時夢中になつてカクレンボを續けて居たが、頓て二時の時計を聞くと、貞吉は一先づ二人を一所に集め、

『さあもうを八つに間がないから、もう一度限りにして廢しませう。今度は特別で僕が目を閉て居るよ。早くお隱れ。そら一、二、三！』

●時間を守る事

小供に時間を嚴守させる事は、家庭の主なる躾けの一つである。若し此躾けを怠諸にして置く母親があるならば、其子供は他日社會へ出るに及んで、人々の厄介物となるであらう。不信用な人間と見做されるであらう。ワシントンと云ふ偉い人の書記、或日出頭が大層おくれた。そこで其書記先生は一生懸命、時計の狂つて居た事なぞ口實にして謝罪すると、ワシントンはかう答へた。「何でも好い。只お前が正しい時計を備へて置く必要があらう。でなければ、私が他の書記を雇入れる迄の事だ。」

かう云つて時刻を見斗らひ、『さあ行くよ。』と掛聲して、どたばたと其部屋を驅出したが、間もなく『やッ。』と云ふ聲が聞えるから、其方を見ると、姉娘の櫻子が**オツカサン**の部屋の押入から見付け出されたのであつた。

『さあ、今度は姫子さんだ！』

貞吉は獨言を云つて、又外の方へ搜しに出掛けたが、姫子は何處をどう巧く隱れ込んだものか、有丈の部屋の押入や戸棚を吟味しても、終に見當らないのである。

『どうしたのだらう。不思議だ！、櫻子さんも一所に搜して下さい。』

と、今度は二人掛りで、こゝぞと思ふ所を蜘蛛の巣だらけになつて搜したが駄目であつた。其内に三十分が打つたので、二人は仕方なく浴場へ急ぎ、汚れた顏と手とを洗つて**オツカサン**の部屋へおやつの御馳走を戴きに行つた。すると**オツカサン**は不思議さうに二人の顏を見て、

『姫子さんはどうしました？』

『あのう、何處を搜しても見付からないのですもの。だけれど、暫時經てば獨りで出て來るでせう。』

『さう、何處へ隱れて居るのだらうねえ。可笑しいちやないか。』

さうかうして居る間に、十分も經つたが一向姫子が出て來ないので、さあ**オツカサン**は心配し出した。

『あの子は何と云ふうつかりなのだらう。まだ平氣で濟し込んで居るのぢやありませんか。』

『だつて、お家の隅々から押入、殘らず搜したのですもの、二人で以て。』

折から其家へ下婢の松が、氣味の惡さうな面色をして入り來り、

『あの奧樣、只今妾が物置へ參りましたら、何だか犬の子の唸るやうた聲が致しますが……』

これを聞くと、**オツカサン**は宙を飛ぶやうに奧の物置きへ直と驅付け、そつと樣子を覗ふとどうやら其聲が姫子のすゝり泣きのそれであるらしい。そこで、**オツカサン**は突然二人の小供を呼び、一所になつて樫の

木造りの古い長持の蓋を開けて見ると、案の定、姫子はそこに涙組んで座つて居る。

「カ、カアサン、妾はねえ、宜い隠れ場がなかつたから、カアサンがいけないと仰有つた所へ來ちやつたの、だけれど、長持の蓋が此樣に重いとは知らなかつたわ。妾は悲しくなつて泣いたけれど、誰も來て下さらなかつたのだもの……』

「おゝ憫然に……蓋は重くはないのだけれど、生憎と錠前が掛つちやつたのさ。まあそれでも宜かつたこと、此所に鼠の明けた穴がなからうものなら、姫子さんは窒息して了つたかも知れやしないのよ。』

貞吉は姫子の肩に手を置いて、

「堪忍おしよ。ねえ。』

櫻子も頻りに妹をいたはり乍ら、

「松が來なかつたら、どんなにお困りだつたらう。だけれど、妾達は姫子さんが此樣な處に隠れて居やうとは考へなかつたのだもの。』

『今度からもう此樣な事はしませんから、カアサン怒らないで頂戴！ねえ。』

やがてオツカサンは姫子を抱いて行き、改めて皆々お八つの御馳走を戴いた。

食事中の時間

—笑ひの効用—

ドクトル　有田九皐

抑も憂悲と消化不良とは、一種離る可かざる關係があるのである。世間には身体の衛生法を尊重する人で、精神上の愉快は所有名醫の良藥にも勝る効能のあると云ふ事を、往々知らない者がある。夫で彼等の中には大切なる食事の時間に、唯自分の職務上の苦痛話や、或は又他の色々の困難な事情などを追想して、而して自ら憂悲を求め、沈默しながら不愉快に飲食して居る者もある。又或人は、食事中に快活な談話をなし、聲を出して笑ひ合ふ事を一圖に不体裁であると信じ、殊更に外形を作り、体裁を飾つて、鹿爪らしい顔をして喰つたり飲んだりして居る人もある。又或人は隣席の客人が愉快相に談笑し乍ら飲食して居るのを見て、却て己の心を惱まし、不機嫌な顔をして居る輩も見受けられる。

斯樣な人々の。此の如き精神の不愉快は、大に其人の消化機能に影響を及ぼし遂には腸胃の衰弱症とか、

消化不良症とか云ふ樣な病症の原因となる者である。これに反して、平生精神の快活なる人々は、消化不良などの病症が殆んどない。實に精神快活にして常に心に幸福を感じ、而して愉快なる性質を有する人々には、消化不良症と稱する一種の病魔は寄り附かないのである。デあるから何事かに心を痛め沈思煩悶した人々には胃弱症に犯されない人は無い。斯く吾々の憂悲が消化不良症を惹起す如く、腸胃の衰弱症は亦腦髓神經の衰弱を來し、從て憂鬱なる人を製造する事になる。で、時として其何れが先の原因であるかを判斷するに苦しむ場合もある。要するに人の不愉快の感念、憂愁の情は、必ず消化機能に大害を及ぼし、遂に色々なる疾病の原因を爲すことは、吾々日々の實驗に照して明了である。

世には左程衛生的の思慮もなく、食物を撰擇する智識もなく、唯與へられたる物を無暗に飲食して居ても比較的消化不良症に罹らない人がある。これは其人の運動と、愉快なる精神と、快活なる快質とに依る事は勿論であらう。左れど、又或一種の衛生家は、餘りに思ひ煩ひ過ぎて却て消化機能を害するのもある。夫で、吾等は何物でも無暗矢鱈に飲食し、胃袋は丸で一種の塵捨場でゞもある樣な不注意をしてはならぬが、同時に亦餘り衛生學に拘泥して、意外の弊害に陷つてはならぬ。假令衛生的食餌と雖ども、嫌ひな物を無理に食せば何の効能も無ひ計りで無く、時に却て大害を釀す事もある。夫で吾等は自然(神)の與へた物をば感謝と愉快とに滿ちた精神で以て飲食し、而して身体の強健を保ち無病長壽を務めねばならぬ。

吾等は食事の時間を、最も愉快な時として費さねばならぬ。夫で、吾等は互に不愉快を感ずる樣な話は、食事の時に於て勉めて避けねばならぬ。吾等が食膳に在る間は、互に愉快を與ふる樣に談笑する事を務めねばならぬ。食事の時間には常に無邪氣な愉快な談話を試みて、家族(來客あれば無論夫も共々に)共々、樂しく飲食する事は一種の善き福音傳道で、又お互の腸胃に對しても最も良き福音である。故に予は此一種の傳道を各自の家庭に注入し、而して精神的衛生法を常に良く守りたいと思ふのである。因に云ふ吾等が心より大に笑ひを發する時は横隔膜が擧上せられ、且又腸胃に一種の運動が起つて非常に消化作用を補ひ助くるものである。

お竹どんの牛乳

牛乳屋の女中のお竹どんは、實に氣前がよくて、仕事に念を入れるので、それで其家の主婦さんはいか程かよい牛乳をほうびにやつた。

でお竹どんは其牛乳の入物を頭にのせて、獨言を云ひ〳〵市中の方へやつてきた。それは今貰つた乳を賣らうと思つたのである。

『これを賣つて六十錢にもなれば、お隣りのアノ奇麗な鷄の卵が二十は買へるよ。そしたら、主婦さんは屹度牝鷄をかして下さるだらうから、今にどう計算て見ても、雛子の十二やそこらは妾が取れるわ。雛子はこんどのお祭りまでには成長なるだらう。其頃は一番價の出た時だから、それを賣つて五圓位もうけるはやすいことだ。

そうなると、私は先日店で見て置いた着物を買はう。それから簪もリボンも一所に買はう。そして祭りに出掛けうものなら、まアどんなに引立つ事だらう！

六さんも其處に行合はせて居て、妾を見付けると、すぐに側に寄て來て、またもとどうりにならうとお云ひだよ屹度……其時妾はオイソレと承知はしない積りさ。それで……妾に跳りの相手になッて吳れとお云ひだつたら、妾はかう頭を振つて見せ……

こゝに哀れを止めたのはお竹どんである。獨言をしながらツイうつかりして頭をふつた計りで、頭上の入物は落ち、そこら一ツぱい牛乳だらけ。

ほんとに氣の毒なお竹どんだ。これが鷄卵や雛や着物や簪や、リボンや、其他一切のあてこみのお別れであつた。

斯樣に當事は向ふから外れて來るもの。假令幾何程鷄の卵子を持つて居たとてそれが孵化つて仕舞ふ迄は決して雛子の數をあて込んで置くものぢやありません。（安藤火州）

（乞食）奥さん。
（奥樣）何だい？
（乞食）私が犬のやうに吠へたら、犬小屋へ入れて飼つて下さいますか。

花と家庭（二）

（植物栽培の利益）

久田二葉

利益と云ふ字は、小生の至極キライな字であるが、『人生を益する』と云ふ語の縮まつたものとして『植物栽培の利益』と書いたのだ。であるからこゝでは金がイクラ儲かると云ふことは少しも説明せぬ。讀者諒せられよ。

△花は愛の子にして救世主也。

世界にありとあらゆるものは皆な愛の子である。われ〳〵の棲む地球も、社會も愛の子であれば、馬や牛や草や木も愛の子である。しかしながら、無情にして、お察しなしの今の人はそれを知らぬ。けれど彼等とても人の子（即ち愛の子）であるから、ある顯著な愛の子の實例を見ると『ハンなるほど』と感嘆することがある、此の感嘆の聲は神の聲である、既に神の聲であるから、『お察しなき今の人』なる肩書を取つてやらねばならぬ。さらば今の冷酷無情なる人に神の聲を放たした『顯著なる實例』とはなんであらうか、余は『花と實』であると答へる。

野に自生して居る花は自然の愛の子であッて、庭に作ッてある花は自然と人との愛の子である。であるからどんなトンバな人でも、奇麗な花を見ると、にッこり!!齒を見せる。もしそれが自分の庭に生へて居れば、雜草も除き蟲も取ッてやらうとする。と云ふやうに手入をすればするほど花は奇麗に見へ、『來年又た咲いて吳れ』と望みを囑せられて散る。ソコデ來年は細君共々種子を播いてみる、生へる、また去年のやうに美しい花が咲くと懐ふて培へ愛する、時節が來れば、去年のより一層美しいのを咲く、『ハンなるほど。』が出るのである。花は實に愛の兒であると思ふやうになるのである。話しは元へかへるが總てのものが愛の子であッて、愛は空に歸せぬものであると、今の世の中の人が察して、花を愛し家を愛して吳れれば、娑婆は略ぼ極樂に近いものとなるのである。即ち苺を愛すれば、白

い可愛らしい花と、眞赤な美しい實とが造られて、嚴なる天の理法と自然の精なる技巧と妙なる意匠とを詳かにすることが出來、愛が多い丈けそれ丈け一層の美（形の美、色の美、味の美）を增し、如何なる小事でも『愛』に出たことは、少しも空に歸しないことが學ばれる。或る人は云ふた、吾れ等の培ふ花は、吾等を神の園に導く飛び石であると。此の邊を學び味ふ人は、身は人苦に惱むも心はいつも極樂の人である。吾が黨の人である。眞人間である。

アア!!吾が花は、腐れたる世の救主である!!

△花は美神を宿す健康の母也。

花は奇麗であることは、今の世の黃金崇拜者でも否むまい。されど度すべからざる彼等は、ヒヨットすると花を彼れ等の、動物的慾袋へ入れて『面白くなけにやコンナことは出來ぬ』と上ッ面で云ッて、內心では變り物をこしらへて高く賣りつけることを考へたり、植物を研究してエライものにならうとか、新しい學問だから月給をタント出して買ッて呉れるだらうとか

と、ロクでもないことに胸をこがして、面白さうな顔して、植物を研究したり栽培したりする。余はコンナ骨董狂等や似非學生等の手に植物が載せられるのを遺憾に思ふものである。懐へば今迄幾多の似非者流の手にタントの植物は上つて、さぞ泣いたであらう。

と云ふと植物即ち花の利益が無くなるやうだが、實の處、これだから眞の利益が多くなるのである。科學上、衛生上から云ッても、動物は植物と共同して生活するべく出來て居る上、形態の上から幾多の人に、敎訓と感化を與へるのである。日本人にして、松柏科植物の神々しい大樹の感化を受けぬものがあらうか、美神を宿して居る櫻花の感化と敎訓とを受けぬものがあらうか……。

余の知人に鐵道の役人があッて、其の細君は草花を、愛の我が子と一ッしよに育て丶『ウチに花や果物があるから笑ひ聲と笑ひ顔のたへぬので、病の神と貧乏の神はもう入りません、ワタシ等はカネが無くても幸福です』など丶語つて居る。そうしていつも、細君や小

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

童や非番の主人は、日光に晒らされて、清い空氣を吸ふて、果樹や蔬菜や、花の中に見えつ隱れつして、神聖な勞働をやらかして居る。若しそれ其の夕顏棚の下凉みには美神と健康の神は舞ッて來て下さるので、どんなアバラ屋でも貴い〳〵宮殿のやう……。こんな多大の清淨な趣味をもち、健康の神と快樂の神を負ッて居る人は、どんなヘナッチョコでも僕の目には神樣のやうに見える。アア誰れか花を、美神を宿す健康の母と思はぬものがあらうか……。

▲花は平和の神也、理科の敎師也。『景淸を花見の座には七兵衛』で、花見に行つて勳百二十五等を振りまいても駄目だ。權兵衛七兵衛とても花見には何殿にもぺこつく必要はない。唯だ此の一事で見るも花は平和の神である。若し世の中に花がなかつたならば、景淸は一代七兵衛にならなかつたであらう。從つて位階や黃金の光りを振り廻はされる我が國には、平和と云ふものはヨホド減ッたであらう。余に云はせると景淸の一等エラかッた時は（假想）此の七

兵衛になッた花見の時であると思ふ。アア實に『桃の花、むしろ二枚の我が世哉』で、花を見て居る人の眼中には名利も何もないので、人は花に依ッて神になり、神になッて始めて平和の域に達するのである。桂月氏の『田園雜興』の中に自然や兒童や平和に就いて面白い一節があッたから、ちよッと左に拜借した。讀者諸君は、氏の筆に依ッて這般の趣味を感得して下さい。

『園中兒を喜ばしむるものは、梅也、葡萄也、柿也、栗也、無花果也、筍也、鷄也、鯉也、蟬也、とんぼ也此等に對して兒は喜ぶ。喜ぶ兒を見れば、ただうれしき也。慾もなし、名利の念もなし。沈思して自然に對すれば、初めは其の愛すべきを覺ゆ。終には其の敬すべきを覺ゆ。自然の奧には何等かの神異物ひそめるが如く思はる。而して小兒は人類の中にて最も自然に近き者也。よしや子を持つて親の恩は知らずとも、物のあはれは自ら知らるべくや』

☆　☆　☆　☆　☆　☆

兒等の綠の眼に映ずるものには疑問が多い。即ち彼

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

等は新時代の新人物にならねばならぬのだからである。殊に自然に對する疑問が多いので、一々父母に質問する、そこで父母たるものは、花や小動物に就て、家庭園藝から得た知識で、緑したゝる天然の植物園を敎室として一々說明する。そうすると兒童への感化が多いばかりでなく、深く〳〵自然物へ對する趣味の根底を植へることが出來て、實に家庭敎育の絶好資料である、理科の先生である。新時代の新人物になる兒童は、斯くの如くにして自然物の趣味を植へられ、健實にして多趣なる理科思想を植へらるべきである。

始めに書くことを忘れたが、花は社會を美しくすると云ふことも、其の平和平等の神としての働きで、余等は日夕謝せねばならぬことである。もし吾々の散歩する野に、草がなく花がなかッたら如何に沒趣味なものであらうか、我々が日夕仰ぐ山に樹が無かッたら如何に無意味なものであらうか、吾々の食後に、醫者を困らすと云ふ果物が一つも無かッたら如何に無趣味なものであらうか、……

と云ふと如何にも、もッたいをつけるやうだが、今の人は、余りに花の美と節操を蹂躙するから、花の爲め植物の爲め前回から、長々と氣焔を吐いた譯だ。まだ〳〵吐きたらねど、……

▼次號には草花栽培の要素を語る▲

▲贅澤な寢床

先日或印度の酋長の注文により、巴理で製造した寢床は、實に贅澤なもので、其床のわくは名木、之に名工の彫刻した銀製の薔薇。石中の花たばの飾がついて、頭の方には武器が置かれる樣になつて居る。四隅には希臘、西班牙、以太利、佛蘭西の女をかたどつた、黃銅製の像が立つて居る。其像の目は動く樣になつて居る、又右の手は、どれも黃金製の腕輪を飾つてあるが、其手は此寢床に寢る人を團扇であをぎ又は拂子で以て、蠅を追ふ樣になつて居る。一層面白いのは、人が床に横はると、同時に微妙の音樂が聞へる樣に細工がしてある事だ。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

お伽噺

―薄はしまひにどうなつた？

吉田抱水

新道が附いてから、人通りが少なくなつた舊道は、最う大變に荒れて了ひまして、薄なんどが覆さつてゐる位でムいます、道は寂しくつて狹くつて、而して急で石が磊々あつて、誠に歩き惡うムりますが、隣村へ行くには近いものですから、急用や何かの時は皆通るのでムいました。

偖或晩の事、薄達は女郎花に揶揄つたり、用も無いのに桔梗を手招いたりして居りましたが、退屈したと見えまして、思ひ／＼の自慢話や手柄話、それが此度は人間の上にうつりましたのです。

甲『人間と云ふ奴は案外臆病だね、其臆病な奴等が寄り合つて、膽だめしと云ふのをする相だが……ソラ君知つてるだらう、此間の……。』

乙『ウム知つてる知つてる。仲間が首を撫で丶やつたら腰を拔かしたと云ふ、ハツハヽヽヽ意氣地のない奴さあれだらう。』

丙『君達は他の事を嗤ふが、僕は甚い目に遭つたよ。何しろ蜻蛉を釣りに來た子供が、喧嘩を始めて、僕の上へ組むだまゝ轉がつたんだもの。』

甲『何で引掻いてやらなかつたの。』

丙『引掻くにも何も。正面から來たのだから堪らない此通り腕は挫く、着物は泥まみれ、帽子も無くしちまつた仕儀なのだ、いやはや人間も惡戯者には恐れるよ眞箇に。』

乙『君、其樣に萎れちまふな。僕も危ふく君と同一樣な目に遭はうとしたとが有るよ。何時も來る牛方の慢助さ。あの日は大風の翌日で、僕は身體が痛いので道の方へ樂々と延ばして居ると、いやつて程衝突つたのだ、僕は眞箇に泣きたくなつたね。殘念しいから思ひッきり手を搔いてやつた。無論平常自慢斗りして通る奴だから、小面が憎いッていふのも手傳つたのさ。すると其場は痛いと言つたばかりで、何もせずに行つて

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

了つた。が歸る時を見ると、手の甲へ膏藥を貼つて居たよ氣持が宜かッたせ、そりやあ。』

甲『氣持が宜いッて云ふと、僕は彼時の事を思ひ出さずには居られない。』

乙『眇　兼のとか？。』

甲『左樣、あれは全く僕の手柄だらう。兼が草鞋の紐を結ばうとして俯向いた時、あの淸しい左の瞳孔をやつたのだからね。』

丙『其男は何うした、今でも此道を通るか。』

乙『君は知らぬのか、放心てるね。馬子の話では何でも病院へ入つて、それで癒らなかつた相だ。今では村は本名を呼ばずに眇兼……其方が通りが宜いとさ。』

話が途切れますと、四邊では鈴虫は銀鈴を振る樣な聲で唄ひ出しますし、松虫馬追皆得意の節を唄ひます。薄は默つて了つて、首を振りながら感心して聞いて居りますと、向ふの眞闇がりに、提灯の光が見えました。

甲『オイ君、誰か來たせ。』

乙『ウム左樣だ、一つ甚い目に逢はしてやらう。』

丙『僕も久し振りに讎を打たうか。』

一同『遣れ、やれ、遣るべし。』と斗り早速同志を手招いで、皆道の方へ身體を伏せて、來るのを待ち搆へて居ります。

『何うも甚い薄だな。』

『旦那、隨分甚いでせう。俺なんざあ毎日々々、此處を通るので、手や足に生疵が絶えやしませぬわ。アッ痛つ、旦那お氣を付けなさい。』

『ヲ痛つ、これは甚い。俺も永らく他地へ行つてたが歸つて見ると、悉皆村が變つて了つて居るので愕いたよ。此道も其一つだ。』

『左樣でせうよ……旦那、俺は甚い事切りましたせ。』

『最う直だ。我慢せい、俺だつて同じだ。』

二人連の人は、道を辿つて行つて了ひました。

薄は身を躍らして、勝利を得顏に戰いて居ります。

其翌日數多の人足が來て、薄は頭を敲かれ腕を折られ悉く切られて了つた、それは村へ持つて行かれて、牛や馬の飼餌となりましたとさ。めでたし、めでたし。

衛生の話

近藤生

家庭に於て第一に喜ばしきことは、家内打揃ふて身躰の壯健なることである。家族の內誰か一人でも病弱のものがあるときは、其家の喜びは忽ちに消ゑてしまふ。たとへ如何程財產を積み、如何程位高くとも、常に青白い顏して、醫藥をのみ友として居る樣で何の樂しみがあらう。そこへなると、身賤しく貧なりと雖も、身躰壯健で思ふやうに働くことのできるときは、是れほど樂しいことはないのである。農夫などが終日田野に汗を流して立ち働き、日暮れに揃ふて家にかへり、夕げの膳に向ふとき、如何に其味ひの美はしきか。如何に安慰の情の湧きいづるか。予は人生に是れほど清くたのしきことはあるまいと思ふ。

まことに望むべきは健康、恐るべきは病である。で、この病を未發に防ぎ、健康を得るの道は即ち衛生である。よき家庭には必ずこの衛生上の心得がなくてはならぬ。

衛生の道は決してむづかしいことではない。只平生衣食住と運動の上に僅かの注意をそゝげばよいのである。一言にて之れをいへば、其程を知るといふこと、即ち何事も過不及なく、其適度を守ると云ふことである。益軒先生の養生訓の中に、『養生に四要あり。暴怒を去り、思慮を少しく、言語を少くし、嗜好を少くすべし。』と、又久しく行き、久しく坐し、久しく立ち、久しく臥し、久しく語るべからず。』とある。

此頃、予は八隅景山先生の著『養生一言草と』いふものを見た。これは天保年間の發行で今から見るとずいぶん如何わしき事もある樣だが、又其中には、よく要領を得て今日の研究されたる衛生學にもかなひ、尚又其いひ方平易に、面白く、多く和歌を以て示されたば、誰にもよくわかり、記憶にも便利である。今予は其內より必要とおもふ處々を引き出して、其間にすこし愚見を述べやうとおもふ。又二三個所其順序を易へた處もある。讀者諸君は其心して御覽を願ふ。

（一）養生雜話

養生はたやすく、不養生はむつかし。善事は手輕くしてむつかしからず。惡事は手重くおつかうなり。一は自然の道にかなひ、一はさからう故なり。

養生のことは天地自然の道といへるは實に至言であると思ふ。凡そ宇宙間の萬物が自然に生育する

さまを見るに、何れも其天授の性に從ひ、よく養生の道を守り、强壯美麗に長壽し繁殖する。彼の小動物の如きも、吾人人類より之を害せぬ以上は、決して中途に夭死などすることはない吾人は己れの慾に迷つて其度を忘れ、養生の道にそむき、大切の身躰を傷り、生命を危くするに至る。まことに羞づべきことではないか。

幼稚もの丶遊戲は皆な天然自然の道にて、男女出生してより、だん〳〵と坐りて、はい習い、歯を生じ、立ち歩るき、言をいひ、乳をはなれ、食をくらひ、歳三つ四つ五つ六つになるに從つて、男女夫々遊びをなす。是れ天より養育して其性に受け得たる事にてやはり養生のはじめなり。

小供の遊戲は實に彼等の生命である。彼等は是れにより、身神の生長發達を促し行くものである。みだりに之を抑制するは甚だわるい。おとなしい子だなど丶祖母達にほめりやされる者は、已に其身體の虛弱を示して居る。小供はなか〳〵おとなしくして居るべきものではない。活潑は其天性だから、つとめて野外に其好む所を遊ばしむべきである。

養生には心氣を養ふべし。

身體の衰弱より精神の沈欝を來たし、精神の不快より身體の衰弱を見るは明かである。生理學者の說によれば、人の精神壯快なるときは、血液の巡行もよく整ひ、消化作用も敏活なりと、又西洋の諺にも『幸福は最良の强壯濟なり。』とある。常に身の行ひを正し、心を愉快に持ち行かば、身神共に必ず健全を保てるであらう。

（二）養生手引歌

養生はかた〳〵よらず片よらず中の所をするが肝要

養生はとにもかくにも津の國のなにはの事もかたよるはあし

養生は氣をはれやかに曇りなく事少きを第一と知れ

言少く思ひ少く飾りなく諂らはぬこそ養生と知れ

養生は疾の出でぬ手あてなり其用心をまへ方にせよ

養生とは心氣つかはず大酒せず食をひかへて獨りねをせよ

養生は老莊のみに限るまじ天地開けしはじめての道

（三）日用飲食の歌

飲食は其人體の大小强弱によりて各分量のきはまりあり十分の所を八分食すればよきぞ大酒大食は必ず

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

其身を傷る。
飲食は我身を養ふためのものなれば口のために食ふと思ふべからず。先づ腹のすきを考へ、假令好物なる品にても八重食をせず硬きもの冷へたるもの油こきもの却つて八九分と思ふ程に食ふべきを肝要とす。

　飲食物の攝用は衛生の大根元である百病多くは口より起る家庭改良の聲は第一に臺所の方よりあげざるべからずと思ふ。抑飲食物は吾人の生を保ち働きをなすの源なれば其適不適は明かに其一身上にあらわる實質と料理と分量とを考へ眞に身體の榮養補給をはからねばならぬ。徒に高價のもの體裁のよきものが滋養の多いものとは云れぬ。價少くして滋養多きもの、調理を巧みにして其味ひをよくするは家妻たるものゝ伎倆なりと思ふ。

好物も多く食へば毒となる内はに食へば藥とぞなる

麥飯は早く消化し氣を開き上戸は殊に下戸も食ふべし。

和らかにしんなく熟する飯ぞよき硬くねばきと焦げたるをいめ。

汁のみは淡泊なるを用ふべし味噌は赤白鹽あまきよし。

魚鳥は時候〳〵に任すべし時分ならざるは食ふべからず。

魚鳥のあざれ破れてすゑたるは必ず食ふべからざるなり。

不煮と煮過したるは味なくて内につかへて氣を塞ぐなり。

うなぎをば世に藥とて惡までも食へば毒となるを知らずや。

　好物却つて身を害す。服膺すべき言。

食後には氣重く眠り催すぞ物にまぎれて腹こなしせよ。

血氣だて若殿原の我慢食いかもの食は毒中の毒。

口々に補藥補劑を用ひても多房飽食しては益なし。

山里は醫師も藥も乏しくて長命多く賀ふるまひする。

（四）　小兒食事

小兒には薄き衣服が藥なり厚着絹類毒と知るべし。

小兒には上菓子多くあたへまじ五疳驚風虫の大毒。

小兒をば傅子女に油斷すなあそび先きにて給物をやる。

　小兒の食事につきては父母たるものゝ最注意を

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

なすべきもの泣くからといふて乳を含ませむりをいふから菓子をといふは實に不都合なる話。よく其時と分量とを考へて必ずみだりにすべきものにあらず小兒の病ひ多くはこれよりおこる。

（五）　衣　類

衣類こそ暑寒を凌ぐためなれば美麗をやめて廉服用ひよ。

禮服の外は麁服は藥なる木綿つむぎは殊更によし。

夏も猶襦袢腹掛はなすまじねびへをせざる用心をせよ。

旅先は猶腹掛を放すまじ疲れて寢ればえてねびへする。

衣服の用は種々あるべけれども其本は寒暑を防くといふにあらん必すこれを忘れてはならぬ。

（六）　居　所

居所は東南をうちひらき夏涼きむねこそせよ。

山を脊に南に水を見る土地ぞ人の住居に能き所なる。

水邊や濕氣の深き所こそ浮種や脚氣に用心をせよ。

居所につきては清潔、換氣の事をよく注意せねばならぬ。

編輯雜信

△十六頁の處で、云ひ洩らした事、云ひ足りなかつた事を拾ひ集めて申さうなら、第一、枯川先生は無論の事、本誌に關係のあつた從來の特別寄書家諸氏にも、精々爲になる家庭論や婦人問題、それから趣味の深い實驗談などを乞ひ受けて、絶えず皆樣の見識を深め、信念を強くするに力める事。第二、前號迄の編輯法は生も眞に斬新な、そして飽きの來ないやり方であると信じる故、今後も矢張り此方式に習つて行くが、其間に多少通俗の分子も入れて、中等以下の（讀書力のある限り）家庭にも徐々にこの新空氣を吹込みたく思ふのです。第三、時には科學を平易に説明して普通知識の補助にあて、地理談歴史談なども加へて、お話の種を供給しませう。又、小説の外にお母樣達には面白いお伽話を紹介しませう。

△一號以來皆樣の寄稿を望んで居た「樂しい生活」は今後とも續々御寄送が願ひたい。尤も其心得は注意にもあつた通り、自分の事と他人の事とを問はず、實際を直寫して下さらねばならぬ。字体も明瞭でなければ誌上には上ぼし難い。それから、今一つ特に婦人方にお勸めしたいのは、各自の「家庭日記」とか月々の「家計表」などを折に觸れて御寄稿あつては如何と云ふ事である。「家計表」は他の家庭の參考になつて面白いし、「家庭日記」は第一に文章（無論口語文）の助けになる。文章と申したからとて、美しい文句をひねくるのではない。自分の思つた事、實際あつた事を飾らずに書くので、若しこれが充分に出來れば、如何なる場合にも耻しくなく、實用にも適するのである。生は歌なぞを苦心して作るより、此方が餘程の上策であらうと思ふのです。御寄稿を待つ。

△次號は本年の終刊ですから、充分實のあるもの作ります。又豫てより皆樣の希望であつた堺氏の家庭は次號の誌上で紹介する事。

△「讀者の顧問」一欄は矢張此後も永續させ、可成的御便宜を計りませう。

△今後凡て編輯事務に關した原稿は生の住所「青山原宿一九一、西村」として、御直送下さる方が便利です。

村井弦齋著（家庭第一實用の書）

增補註釋 食道樂 夏の巻

正價八拾錢

紙數四百餘頁

郵券代用必一割增

送賃 ▲市内五錢▲地方十錢▲臺灣、朝鮮清國三十錢▲米國行開封廿四錢

口繪 岩崎男爵家二階建臺所眞景　挿畫十枚註釋澤山

附錄
西洋食器價格表百三十種
西洋食品價格表三百五十八種

◉夏の巻と云ふと雖も所載の各種料理法は四季通用なり

病人曰く「私どもは毎日何んな食物を戴いたら可いでせう

醫者曰く「食道樂を讀んで消化吸收の良い料理をお拵へなさい

▲一升の酒を飲まんより此書一冊を買ふに如かず

▲有名なる白鉛廢止論は夏の巻にあり

春の巻は二十版　正價郵税夏の巻に同じ

附錄日用食品四百五十種の滋養分明細表あり

東京市京橋區卅間堀三丁目

發行所 報知社出版部（電話新橋二千三百十六番）

大賣捌所 新橋 新橋堂　神田 東京堂　京橋 東海堂

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

月刊 家庭雜誌

家庭之友

見本 郵券六錢

第七號要目

嫁入仕度の改良
- 其一……石黒忠悳
- 其二……山脇房子
- 其三……アグネス、コーツ
- 其四……阿部優子

英國通信……好木督
貧しき牧師の家庭、家庭文庫、英國家庭の頽廢

質素の生活、高尚の思想……安部磯雄

洗濯の話……横川下枝子

幼兒に與ふべき食物……
(明治母の會調査)

家政問答……棚橋絢子
下女の使ひ方、外數件

育兒問答……井上友子
玩具の撰擇、厚着と薄着、外數件

野遊びの行厨(家庭料理)……
サンドヰッチ數種、酢數種

勤儉實話……
(西洋の世帶もち)

定價一冊金五錢(郵税五厘)一ケ年(十二册)前金僅に六十錢(郵税共)の定價を以て發賣す
第一號(五版) 第二號(四版) 第三號(三版)
第四號(三版) 第五號(再版) 第六號(再版)
目下初號より取揃へて注文に應ずべし

血の涙

比律賓 リサアル博士 原著
日本 山田美妙君 譯述
小說

定價參拾錢
郵税四錢

『日本人』評
リサール博士が比律賓に於ける獨立思想の鼓吹者にして又た實に獨立戰爭の先聲者たるは美妙子の著アギナルド傳を讀みし人の知る所本書は博士が『嗚呼、患者―膿毒に半死と爲つた汝、あゝわが比律賓、希くば一日も早く刮目警醒、毒を拔き膿を散らして而して健全なる巨人として此世界の上に立て』と警告して世に出したるものにて比律賓革命の動機となりし**不朽の作**なり、この不朽の原著にして譯するに美妙子特得の筆を以てす、フライアル長老の殘暴、壓制國軍人の迫害、之に對する志士の痛憤苦鬪の狀、眞に讀む者をして意熱し情迫りて悽慘の感に堪へざらしむ我國に於ける**唯一の比律賓文學**にして兼ねて其の**上乘**なるものと謂ふべし

『日本』評
近來の好譯小說其比律賓文學といふの點に於て已に人を動かす者あると同時に著者たるリサアル博士は此著述の爲めに射殺の慘害を蒙り而して此一篇の小說は恰かも我國維新前に於て吉田松陰の遺文に能く長州尊攘の志士を作りしが如く彼有名なるアギナルド將軍を作り他日の義兵戰爭の間接の原因となりしと聞く**字々血、句々涙**敵國外患の迫らんとする志士は一讀感奮興起せざる可らず

出版元 東京市神田區南甲賀町八番地(電話本局三千二百四十六番) 內外出版協會

一部正價 金六拾錢

攻玉社工學校 土木學講義錄

土木工學の普及を圖り親しく登校して學び難きものゝ爲め毎月一回これを發刊し一年半にて完結す、今や既に第三號を出す、第一號の如きは再版も亦た賣盡きんとす、詳細の規程入用の向は郵券を添へて申出づべし、

十一月一日

東京市芝區新錢座町十一番地
攻玉社工學校内
講義錄發行部

攻玉社工學校長大沼文哉先生編

土木工師用 英語讀本

定價金六十錢
郵税金四錢

上卷 雜ノ部（四版）
下卷 道路ノ部（三版）

土木工師諸君が英語を研究せらるゝに唯一の英語讀本なり上卷の程度は普通英語讀本の第三第四位下卷はそれより稍々難きものなり

東京市芝區愛宕下町四丁目二番地
賣捌所 須原屋 **河合富吉**

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

三書共大好評

横井●子女史著（三版）郵税金八錢

家庭料理法

定價四拾五錢
上製金六拾錢

文學博士坪内雄藏先生著（三版）

通俗倫理談

全一冊定價金壹圓廿錢郵税拾錢

東京神田 富山房 裏神保町

東京鐘ヶ淵病院長橋本善次郎先生著

衛生一夕話

（再版）
價卅五錢
郵税六錢

日本女子大學教授 松浦政康先生纂譯

女學叢書

歐米家庭德育佳話

菊版美製●定價金五十錢郵税八錢

青年立志の佳話又成功の美譚等參百條

家庭教育の好讀物●小中女學の修身の良教材

發兌 東京京橋區尾張町二丁目 警醒社書店

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

銀座一丁目河岸通り
帝國貯蓄銀行
（電話新橋）八一六番 二八〇八番

飯倉四ッ辻 飯倉支店 電話新橋一五七四番
赤坂表一丁目 赤坂支店 電話新橋二〇六八番
四谷大通り 四谷支店 電話番町五一〇番
牛込神樂坂 神樂坂支店 電話番町六三〇番
本郷一丁目角 本郷支店 電話下谷七二番
神田須田町 須田町支店 電話本局二〇七三番
兩國米澤町 米澤町支店 電話浪花二五九〇番
淺草吾妻橋通 吾妻橋支店 電話下谷七三番
南品川一丁目 品川支店 電話新橋一一三九番
橫濱吉田町 橫濱支店 電話橫濱一三〇四番
日本橋坂本町 代理店 田中銀行 電話浪花二四〇番

●家庭雜誌目錄

▲第壹號（四月三日發行）（再版）
▲本紙の特色▲我輩の根本思想▲動物虐待防止會▲ユトピアの話▲イソプ教訓談▲家庭文庫の必要▲古書新書▲娘の學ぶべき事▲僕にもオバアさんが欲しい（讀切小說）▲倫敦の日本料理▲編輯及發行事情等

▲第貳號（五月二日發行）（品切）

▲第參號（六月二日發行）（再版）
▲新天地（漫吟）▲隅田川邊の好家庭▲ワシントン及其母（肖像）▲鼠の失策（滑稽畫）▲偶感▲讀者の顧問▲樂しき生活▲結婚離婚の統計▲天文の話▲家庭の消息▲匆々一筆等

▲第四號（七月二日發行）
▲三つ子の感化力（讀切小說）▲不二彥（肖像）▲柿山伏（狂言）▲猪とクヅ鹿（滑稽畫）▲偶感▲讀者の顧問▲樂しき生活▲加藤邸晩餐會の記▲倫敦雜話等

▲第五號（八月二日發行）
▲子供の導き▲細君の說法▲小猫の生理（畫入）▲新案四頭立犬車（滑稽畫）▲望みと疑ひ▲苦痛と不平▲ウソツキ卯太郎▲夫婦の孰れが多く貞實なるか▲世界奇聞▲一口話▲「まだ見ぬ親」梗概等

▲第六號（九月二日發行）
▲百年後の新社會（ベラミーの名著ルッキング、バックワードを縮譯して社會主義の理想を具體的に（小說の形にて）示す

▲第七號（十月二日發行）
▲家庭の道德▲結婚に就ての所感▲盆栽に就ての所感▲女皇陛下萬歲▲蟲のはなし▲花と家庭▲倫敦雜話▲長子相續法▲夫に不正の行爲ありたる場合▲家庭文庫

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

週刊

平民新聞

十一月十五日
初號發行

一、平民新聞は**平民主義、社會主義、平和主義**の見地に立ち、政治、經濟、學術、文藝に關する報道、評論、創作を載す

一、平民新聞は**幸德秋水、堺枯川**の二人專ら其編輯を擔任す

一、平民新聞は**安部磯雄、木下尚江、齋藤綠雨、伊藤銀月、西川光二郎**等の諸氏特に其編輯を援助す

一、平民新聞の紙幅は普通新聞紙の一枚大に過ぎざれども、一頁五段、一段四十行、一行十八字詰にして八頁あり、殊に**簡潔洗錬の文字**を以て內容の豐富を務むるが故に、普通菊版雜誌一冊以上の實質あり

▲定價　一部三錢五厘、廿部前金六十五錢、五十部前金一圓六十錢
（總べて郵稅を要せず）

▲廣告料　一行一回三十錢　**▲購讀申込**は總べて前金の事

發行所　東京市麴町區有樂町三丁目一番地　**平民社**